

## 『理学療法ガイドライン 第2版』の作成経過について

『理学療法ガイドライン 第1版』の作成過程を振り返ると、2008年にガイドライン特別委員会を設置し、0版が2010年3月完成、パブリックコメントを実施し、2011年10月に完成した(担当理事：内山靖氏、部会長：鈴木重行氏)。2014年にはダイジェスト版の作成を開始し、2015年9月に完成した。

2015年12月1日に『理学療法ガイドライン 第2版』の作成のため、第1回ガイドライン・用語策定委員会が日本理学療法士協会にて開催され、日本理学療法士学会分科学会より12名の委員が参加した。日本スポーツ理学療法学会の川島敏夫氏が委員長に互選され、検討が開始された。

2016年4月、第2版に向けて、作成班ごとに班員や外部委員の構成、スコープ案の検討が本格化した。さらにガイドラインの作成方法についての理解を深める目的で、2017年4月には、森實敏夫先生(日本医療機能評価機構[Minds])と河合富士美先生(聖路加国際大学)をお招きして研修会を開催した。また、2017年度より前任の川島敏夫氏に代わり、赤坂が委員長を務めることになり、副委員長に片田圭一氏と諸橋勇氏が互選された。

第2版では、世界的な診療ガイドラインの標準的な作成および運用方法を提案しているMindsの作成方法に準じて作成することを基本方針とし、アドバイザーとして中山孝氏、乙戸崇寛氏、藤本修平氏、佐々木祥氏に加わっていただき、SR研修会を開催した。一方、作成班では班員を対象に修正デルファイ法を実施し、CQを順次決定し、委員会で承認作業を行うこととした。2018年2月にはCQについてパブリックコメントを実施した。3月には、新たに3名のアドバイザー(高崎博司氏、杉田翔氏、小向佳奈子氏)に加わっていただいた。5月より作成班が検索式を提出し、6月から検索式のフィードバックを開始した。この検索式のフィードバックでは「検索式に対するフィードバックシート」を作成し、各班が効率良く修正が行えるように努めた。

2019年10月の時点で検索式の修正が10回となる班があり、全体として検索式がアドバイザーのチェックで承認されたのは全体のおよそ6割にとどまる状況となった一方で、メタアナリシスが終了した班も出てきて、全体の進捗状況に大きな差が生じることとなった。COVID-19の感染拡大により、対面での委員会を開催することが難しくなり、メールでの連絡では委員および関係者との意思疎通に時間差が生じ、齟齬が生まれやすい環境となった。

2020年4月には、①理学療法ガイドライン・用語策定委員会は、ガイドラインを2021年3月(またはできるだけ早期)に書籍(理学療法ガイドライン 第2版)として出版する。また、出版後6か月を目処に、日本理学療法士協会のウェブサイトガイドライン詳細版を掲載する。②委員会による承認を経て文献取り寄せ委託業者への依頼方法を改定し、作成グループへのメール連絡の方法が周知徹底された。③各CQに対して、これまで検討し

てきた推奨文，作成班とSR班を中心に理学療法の専門家としてのステートメントの2種類の形式でまとめていただくこととし，作業が大幅に遅れて推奨文またはステートメントとしてまとめることが難しいCQについては，辞退を検討することにした．なお，推奨では作成までの経過を明らかにする予定であったが，ステートメントや中止となる場合についても作成までの経過について記録を残すこととした．

9月下旬には作成班よりパネル会議後の検討を踏まえて，推奨とステートメントの第1校が提出され，5名の委員による校閲，作成班へのフィードバック後，第2校の提出，5名の委員による校閲，そして作成班で再修正後，12月10日から4回に分けて，パブリックコメントを実施した．さらに，そのパブリックコメントに対して作成班で修正，委員会での承認作業を経て，推奨文とステートメントとして最終原稿をまとめた．ガイドラインを読むための用語と解説，疾患総論，BQについても同様の方法で進め，すべての原稿を完成させることができた．

2021年4月，日本理学療法士学会は一般社団法人日本理学療法学会連合となり，ガイドライン・用語策定委員会は理学療法標準化検討委員会ガイドライン部会となった．

多くの検討と作業を乗り越えて，『理学療法ガイドライン第2版』は2021年秋に発行の運びとなる見通しとなった．第2版は，統括委員会27名，作成班174名，SR班1,193名，外部評価委員25名が関与し，21領域，41疾患・外傷数，そのCQ数は最終的に195，推奨文129，ステートメント66となった．

『理学療法ガイドライン第2版』の作成作業が進むなか，近年はエビデンスを意識した研究論文や発表が多くなった．このことは，エビデンスを意識して文献を確認し，研究活動や臨床での理学療法を行う姿勢，そしてガイドラインなどを参照して根拠に基づく理学療法を実践する姿勢に変化してきたと考えている．

成果物として第2版をまとめたことは大きな仕事であったが，実際にはこの作業を通じて，多くの理学療法士が，エビデンスや科学的視点に基づいて理学療法を提供するように変化してきたことが最大の功利であったと感じている．

2021年8月

一般社団法人 日本理学療法学会連合  
理学療法標準化検討委員会ガイドライン部会  
部会長 赤坂 清和